

## 待たれていた礼拝

——死者は神の子の声を聞くであろう——

ピーター

光の中から響いてくるは アドベントのよろこび  
神の御子イエス・キリスト様が 地に現れた時を祝う聖なるシーズン  
御神よ 全地よ  
天にあるもの 地にあるもの 地の下にあるもの  
今 ことごとくきよめ給え  
神の御子キリスト様を迎える聖なる時に  
光の主よ 今こそ光を 放ち給え

こうして2013年、第一アドベントを迎えることができました。

今年のクリスマス・シーズンはいちだんと深い感動があります。それはわたしたちがクリスマス・シーズンを祝うだけでない、宇宙礼拝と言われる今の時、天にあるもの、地の上のもの、地の下のものたちを含む壮大な宇宙のクリスマスが開けてきたからです。

天上のものたちが主の生誕を祝う。もちろんそうでしょう。

地の上のものたちが主の生誕を祝う。当然でしょう。

しかし、地の下のものたちが——それが何を指すのかははっきり分からなくても——クリスマスを祝うなどということが本当にあるのだろうか。

そんなことはかつて聞いたことがないし、第一「死者の世界」について言及するのは、キリスト教会においてはタブーなのですね。死者の救いなどと言い出すと、さっそく「異端だ」「カルトだ」と非難轟々(ごうごう)です。キリストを信ぜず洗礼を受けずに死んだ者は永遠の地獄に落とされる。そこから脱出のチャンスは皆無。伝統的なキリスト教会はそう宣言してはばかりません。

本当にそれが聖書的な解釈かということはひとまず置いて、10月のスペインさんびツアーの後に与えられた *Mortui Audient* の響きに耳を傾けてください。

♪ *Mortui audient vocem Filii Dei* ♪

モルトゥイ アウディエント ウォークム フィリイ デイー

これはヨハネ5章25節「死者は神の子の声を聞くであろう」のラテン語テキストです。

「モルトゥイ」は *mortuus* の複数形、すなわち「死者たち」。英語の *mortal* (死すべきもの)の語源となったものです。「フィリイ デイー」は、「神の子」キリスト。

こここのところの全文は次のようになります。

よくよくあなたがたに言うておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。  
(ヨハネ 5:25)

「よくよく」というのは、原文ギリシャ語では *ἀμὴν ἀμὴν* (アーメン、アーメン)。「アーメン」は神の絶対肯定のことばです。それをダブルで言うということは、これ以上確かなことはない、太陽が東から上がり西に沈む以上に確実なことだということです。何がそれほど確実であるのかと言えば、「死んだ人たちが神の子の声を聞く時が来る」という事実を指しています。

驚くべきことばではありませんか。

今までも何度も読んだはずのみことばなのに、今、このことばは強烈なインパクトをもってわたしたちに迫ってきます。それは、今が聖書の言う終末の時であり、聖書のすべてが成就する時となったからです。

イエスは二千年前に、このことばを言われたのですが、キリスト教会は馬の耳に念仏のごとくその意味するところを真剣に受け止めてきませんでした。しかし、もう違うのです。2013年の今、もはやこのことばは空念仏ではなく、すさまじいいのちをもって迫りつつあるのが分かるでしょう。

まことにその時は、「今すでにきている。そして聞く人は生きる」。

ここで「生きる」というギリシャ語は、永遠のいのちを意味する名詞 ζωη (ゾーエ)の未来形動詞 ζήσουσιν (ゼースウシン)が使われていますから、「そして聞く人は永遠に生きるであろう」と訳されます。すなわち暗黒の中に閉じ込められていた死者たちが、キリストの声を聞いて、永遠のいのちに息づくようになるということです。ほんとうにすごいことが言われています。

「聞く」とはただの受動ではありません。「聞きたい」という意志があるから「聞ける」のです。

「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストのことばから来るのである」(ロマ 10:17)ということばがあります。信仰は「聞く」ことによって生まれる。

人はいろいろなものを聞く。しかし、まことのいのちを与えることばはキリストのことばです。聞く究極は、キリストに出会うということです。

「ことば」というギリシャ語は2つあります。λόγος (ロゴス)と ῥήμα (レーマ)。2つは同じようにも使われていますが、強いて違いをあげるなら、前者が客観的なことば、聖書に記述されている神のことばを意味し、後者は主観的なことば、個々人に語りかけられる神のことばと理解してもいいでしょう。

「はじめに言があった」というヨハネ福音書の冒頭の「ことば」は、ロゴスです。それに反し、「聞くことはキリストのことばから来る」という時、「レーマ」ということばが使われています。ロゴスは、誰でも同じように読めることばです。レーマは、主観的と言えばかなり語弊がありますが、ある人には聞こえても、他の人には聞こえていない。聞こえる人には、非常に意味のあることばとなります。なにしろ神がその人に直接語っているのですから。

「白いハト」の文中に、しばしば「ときあかし」というのがありますね。あれがレーマなのです。「ときあかし」のことばは、聖書の直接のことばではありませんが、聖霊が語っていることばですから、聞く耳をもつ者には非常なインパクトをもって迫ってきます。事実、信じたばかりの赤ん坊だった美津子さんは、「ときあかし」によって急速に成長しました。

「死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでに来ている。そして聞く人は生きるであろう」というみことばは、聖なる息吹を浴び、ものすごい力をもってわたしたちに迫っています。わたしたちはまるで初めてこのことばを聞いたかのように驚き、そしてよろこびました。

わたしたちだけではない、地の下のものたちがよるこんでいるのです。

10月のスペインさんびツアーの折り、サンタ・マリア・デル・マール教会の祭壇の後ろからさんび隊の歌声を吸収していた黒頭巾、黒マントの者たちとは、「地の下のものたち」でしょう。彼らはこの時を切望していたのです。天のさんびは、「神の子の声」だからです。それを聞いて暗闇から光の国に移されたのだと、私は思います。

聞けば、バルセロナは悪名高いスペイン宗教裁判が200年近く執り行われた街であり、サンタ・マリア・デル・マール教会はその中心的な場であったと言います。宗教家や権力者はキリストの名をかたって、ユダヤ教徒、イスラム教徒、そして後にはプロテスタントの信者を迫害し、最も非道な最も悪魔的な残虐行為を為しました。

ヨーロッパの教会は、恐ろしい血で塗られた。残虐行為を行ったのは、カトリック教会だけではありません

ん。

プロテスタントも、カトリック教徒を火炙りの刑に処している。悪魔は両陣営に働きました。

そのためでしょうか、現在のヨーロッパの教会ははなはだしく衰退しています。地の下からの呪いを受けているのかもしれませんが。

だからわたしたちが、ここで天のさんびを歌い、キリストの贖いをたたえたのです。主が「気が狂わんばかりに愛しているヨーロッパ」とは、残虐な罪を犯さずには生きていけなかった者たちへの、主のゆるしと愛を言うのです。

それは、ヨーロッパだけではない、残虐なことをするわれら人間すべてに対する主のあわれみを意味します。

この愛がさんびとなって地の下まで届くのです。そしてそれを聞く者は、永遠のいのちに生きる。

地上には、昔から今に至るまで、あまりにもたくさんの悲劇や憎しみが繰り返されてきました。

アドベントのシーズンになると、私には、いつも思い出す記事があります。クリスチャンになった最初の頃から、気になっていました。クリスマス物語とは、あまりにもそぐわない悲劇が語られているからです。

**叫び泣く大いなる悲しみの声がラマで聞えた。ラケルはその子らのためになげいた。子らがもはやいないので、慰められることさえ願わなかった。**  
(マタイ 2:18)

イエスが生まれた時、パレスティナ地方一帯で、ヘロデ王の命令により2歳以下の男の子全員が惨殺されました。東方の占星術の博士たちがヘロデ王のところに来て、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」(マタイ 2:2)と言ったからです。王は自分の権威が失われるかもしれないというパラノイア(被害妄想)でした。自分の位置を守るためには、どんな犠牲を払ってもかまわない。今でも独裁政権の国ではこれに似た惨事が起きていますが、専制主義は悪魔の業です。

神はいないのか。こんな非道に対し、なぜ神は沈黙されているのか。子を殺された母親たち、ラケルはあまりの悲しみ、絶望のために、もはや慰められることさえ拒否した。悲しみの極限です。

これがクリスマス・シーズンの幕開けとなりました。初めて聖書を読んだ私には、あまりに不可解な記事でした。しかし今、全部が分かったわけではないが、光が見えます。それは宇宙礼拝の今、神の御子キリスト・イエスの贖いがラケルに、母親たちに、そして幼くして殺されたたくさんの男の子たちに、光の射すのが見えてきたからです。

地の下のものに関して、美津子さんは、「三角の旗を持った、ちっちゃな子供たち」の幻を見えています。初め、その話を聞いた時、「あ、生まれなかった子たちだな」と、私は直感しました。しかし、生まれなかった子供だけではない、幼くして地を去った子供たちの総勢でしょうね。後で聞くと外国系の、それもユダヤ人の子供たち、男の子ばかりのように見えたと言いますから、ヘロデに殺された子供たちかもしれない。

その子たちが旗を振って風の教会の礼拝によるこび馳せ参じている。この子たちにキリストの贖いの光が与えられる時が来た。

「それは結構な話だけど、でもヘロデ王はゆるされないよね」

あなたはそう言う。もつとだ。私だって、極悪非道の暴君をゆるしたくない。ナチがゆるされるなんて、とんでもない。

しかしそれは、わたしたちの感情的な判断に過ぎません。わたしたちが「あの人だけはゆるせない」と言う時、自分はその人間と同じではないと思っているからです。たしかにあなたはナチやヘロデのような非道なことはしません。しかし、あなたも悪の種を持っているではありませんか。完全無欠な人間なんて、この世には一人もいません。人間とは影を持つ存在なのです。

裁きは、神に任せなさい。

私は、「天国は洗礼を受けたクリスチャンだけのものである」というような原理主義の主張を聞くと、「そうじゃないよな」という違和感を感じます。同時に、「誰も彼も、ナチもヘロデも今は天国にいるよ」という話を聞くと、また違った違和感を感じます。霊的ヒューマニズムの臭いがイヤなのです。

死後の裁きはあります。先ほど引用しました「死人が神の子の声を聞く」というテキストのすぐ後に、次のようなイエスのことばが続きます。

そして子は人の子であるから、子にさばきを行う権威をお与えになった。このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう。

(ヨハネ 5:27-29)

死人が神の子の声を聞き、永遠のいのちに生きようになるためには、まず「裁き」があるのです。神の裁きは、いちばん深い意味で、神のいやし。このことをしっかり理解していないと、聖書の言う「裁き」の意味を誤解します。

あたかも勸善懲悪(かんぜんちょうあく)のような言い方ですが、道徳的な意味合いはありません。神は、人の罪をゆるし最終的には人をいやされる方ですから、まずその人の生前の行為に光を当てるのです。「死人はさばきを受けるためによみがえる」のです。ここに安易なヒューマニズムの入る余地はありません。厳正なる裁きがあるのです。

しかし、神の裁きはいやしです。最終的には、すべての被造物は神の裁きを経てキリストの贖いのいのちに取り込まれます。遅かれ早かれ、光の中に来る。どのようなプロセスを経るのか詳らかではないが、全被造物に対する神のあわれみに限りはない。

「白いハト」の中に美津子さんが見た美しい幻を、私は信じています。

いのちの大河がある。中ほどに岩があり、水は避けて流れている。救いの水は、岩を避けるのだろうか。

「イエス様、あなたを知らなかった者、いやあなたに反対した者、そんな人たちにも救いはあるのですか」と美津子さんが疑問を口にすると、「わたしのいのちの水が被わないものがあるのか」と、逆に問われます。

そうなのです。究極には、すべての被造物は救いの水に与(あずかる)のです。これは決して安易な霊的ヒューマニズムではありません。光の光、徹底した霊のリアリズムです。曖昧なものはことごとく光の中で昇華され、すべての被造物はキリスト讃歌を歌います。

聖なる光に照射され、「ああ、私はなんと愚かなことをしてきたことか。主よ、おゆるしてください」と、魂の底から主のあわれみを乞うのです。あなたはいのちの中に入れられる。光にさらされたものはことごとく光となるからです。

だから私は宇宙礼拝が開かれて来た今、わたしたち子羊に与えられた大きな大きなミッションに驚きます。モルトウイ(死んだ人たち)に向かい、「さあ、キリスト・イエス様の光の中に行きなさい。天のさんびに浸りなさい」と宣言するなら、そのごとくなる。暗闇に蹲っていたものたちは、キリストの救いに入るのです。

「白いハト」6巻の中に、こんな「ときあかし」があります。

**礼拝せよ**

**いにしへの者といにしへのその又いにしへの者たちと**

**今ある者たちと共に礼拝せよ**

太古の者も、今在る者も、一つとなってキリストをあがめる宇宙礼拝の時が来たのです。いのちの大河

は、わたしたちをキリスト礼拝に導きます。

この「ときあかし」が与えられたのは1992年です。当時その意味がよく分かっていなかったが、今はっきりと分かります。宇宙礼拝の時が来たからです。

「まことの礼拝をする者たちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである」(ヨハネ 4:23)と、主は言われる。主が求めておられたのは、宇宙礼拝をする者たちです。死者も生者も一つとなって礼拝する時を、神ご自身が待っておられたのです。

霊の目が開かれると、キリストのからだの全貌がおぼろげながらも見えてきます。真理の全体が見えてきます。すると、たくさんたくさんの方たち、いにしへの者たち、その又いにしへの者たち、数え切れないくらいの方たちが共に礼拝するのが分かるでしょう。

宇宙礼拝がその姿を現してきました。キリストのからだはその姿を現してきました。天のもの、地のもの、地の下のものたち、ことごとくがキリストを礼拝する。

キリスト教会は長い長い間、この「地の下のものたち」を無視してきました。中世のカトリック教会では、13世紀頃、「死者のためのミサ」を設けましたが、キリストの贖いの全貌がまだ見えていなかったのも、ミサは「死者が救われてほしい」という地上の者の願望の域を出ませんでした。このミサからレクイエム(安らかに憩い給え)が生まれたのですが、やがて西欧音楽の一ジャンルとしてしか意味がなく、中途半端なものになりました。

しかし、レクイエムの真意は、今や子羊の礼拝によって実現するようになりました。レクイエムが目指していたのは、「古(いにしえ)の者と今在る者が共に主をあがめる」礼拝だったのです。間違いありません。

死んだ者は滅びたのではない。彼らが永遠のいのち、御子イエス・キリストの光の中に来るために、さあ、別れた父や母、子供、兄弟、友、ことごとくをキリストの礼拝に招待するのです。

2013年12月1日

(「ぶどうの木 2014年1月号」より)